

「新時代」を生きる、私達の人権

蕪崎市立蕪崎東中学校三年 横森 永奈

「人権」とは、人が生まれながらに持つ権利であると、呼吸をするように自然と捉えていたと思う。しかし、思い起こしてみると・・・私は生まれながらにして自由に考え、自由に行動し、平等に生き、幸福に暮らしてきたのだろうか。幼少期に遡り、まだ限られた大人からしか知識や情報を得られなかった頃、それは当然のことで、正しいことで、幸せなことなのだ、押しつけられて今があるのではないかと、少しの恐怖と嫌悪感を抱いた自分自身に気づいてしまった。

久しぶりに親が撮影したホームビデオを見返してみた。まだ寝返りもできず、泣くか笑うかで精一杯表現することしかできなかった頃、両親の愛情を受けて、当然だが両親を頼る自分が映り、大切に育ててもらったんだと認識できた。成長と共に、着ている服の色やデザイン、持っているおもちゃ、見させられるアニメのキャラクター。私が決して自分で選んだ物ではないが、両親が与えてくれる物が当然で、疑いもなく間違いのない事と信じて反抗することもなく、髪を伸ばし、どちらかといえば暖色系の服を着て、リボンやハート、猫やうさぎが描かれた持ち物を手にし、女の子が主人公のアニメをよく見て育ってきた。それが不快になったり違和感を覚えることがなかったのがなぜか不思議だが、大げさな言い方をすれば、この時期に『自由に決められる権利』は持ち得なかったと言い切れる。自分の意思を決定したり、行動する能力は未発達であるから、生まれながらに完全に自由に生きて行動することは困難であろう。

しかし、時が過ぎ、両親以外の大人の言葉や忠告も耳にするようになる。両親の双方の祖父母から度々言われたフレーズが『女の子なんだから』だ。大きな声で騒いだり、家の中を姉と走り回ったり、後片付けをしないでいると、それこそよく言われたものだ。男の従兄弟が三人いるが、従兄弟が多少暴れても靴を揃えていなかったとしても、大目に見てもらえていたような気がする。従兄弟が散らかしたおもちゃも、親や祖母に注意されて片付けをしたことを思い出してしまった。

保育園ではさらに男女の性差、区別をされるようになった。男子の持ち物や名前色は青、女子は赤。女子はおままごとなどのおもちゃで遊ばされ、お姫様ごっこをしたりした。内心、男子と他のもので遊びたかったが、先生達が男

女を分けていて、そのとおりにしなければいけないんだと気持ちを押し殺したことを記憶している。今でも一番心がもやもやすることは、生活発表会（全国的にはお遊戯会と言うだろうか。）で自分がこの曲を踊りたいと訴えても、袴を履いて剣を振り回す踊りは男の子が披露するものだと却下された。この件は私の他にもその曲を踊りたい女子がいて、検討を重ねた結果、私もその子も踊ることができたのだが、会の当日も髪はポニーテールの指示、袴の色も本当に着たかった漆黒ではなく、若干淡い色合いの物を用意され、最後まで男女の色分けをして性差を誇張される形であったため、『そこまで大人が性別を分けるこだわりは何なのか』と。今でも大人に投げかけたい質問である。

昭和、平成の時代を苦勞して生きてきた大人だからこそ、今もなお無意識に男女を『差別』とは言わないが、『区別』してはないだろうか？周りの大人は悪気はなく、男女を平気で物や色、言葉や印象で分けている実態は学校でも身近な地域でも遭遇する。姉が水色のランドセルを選んだ時。私が象のキャラクターを選んだ時。大人の勝手な色眼鏡で『変わった子』『女の子らしくない子』と決めつけないでほしい。幸い両親は水色のランドセルも象も可愛いねと賛同してくれたが、通りがかった年配の人に

「青いランドセルなんか背負って。男じゃないんだから。」

と聞こえた時、元気に歩く姉の背中を見て、悲しい気持ちになったことは忘れられない。

大人が、日本の社会が持ち続けてきた偏見やラベリング。それを払拭させるのはまだまだ年月がかかるだろう。当然で正しいと思い込んでいることほど、その意識を変えることはとても難しいことだと思う。

日本の世界幸福度ランキングは47位で、先進国の中では最低という結果に、私は驚きを隠せなかった。日本は海外から見たら魅力ある幸福な国ではないのか？他国に比べ「自由度」と「寛容さ」の項目が低いという実情はまさに、人権がまだまだ守られていないことを公表しているようなものである。また他の先進国に比べ、政治や経済の分野で女性の輩出率が低いため、男女格差が大きくなり、結果として自由に生きる権利が阻まれていることが大きな課題である。自分は幸福、日本は幸福と思い込んでいたが、女性の活躍の場を多少無理してでも広げていくことが、私達が本当に自由で幸せな生活が送れる新時代になると訴えていきたい。